

Newsletter of Japanese Coral Reef Society

No.36 [2007 / 2008 No.3]

contents

page

国際サンゴ礁年2008オープニングイベント 2

NPO/NGO紹介 [黒潮実感センター] 2

日本サンゴ礁学会 第10回大会報告
[ポスター賞] 3

日本サンゴ礁学会 第10回大会報告
[学会賞・川口奨励賞] 4

日本サンゴ礁学会 評議員会・議事録 5

日本サンゴ礁学会 総会議事録 6

日本サンゴ礁学会 名誉会員の紹介 7

安全講習会報告 7

サンゴワークショップ
[サンゴの分類と同定2007] 7

連載1:サンゴしょう夜話 -24- 8





国際サンゴ礁年2008 オープニングイベント

2007年12月9日、立教大学池袋キャンパス太刀川記念館で
「国際サンゴ礁年2008 オープニングイベント」を開催しました。

環境省自然環境局自然環境計画課 森 有希
YUKI_MORI @ env.go.jp



「国際サンゴ礁年」の開始を宣言するとともに、「国際サンゴ礁年」の活動をさらに盛りあげていこうという目的で、環境省と立教大学との共催で開催したものです。

「国際サンゴ礁年」とは、サンゴ礁保全のための国際的な協力の枠組である「国際サンゴ礁イニシアティブ (ICRI)」が、平成18年10月にメキシコで開催された総会において決定したもので、以下のことを目的としています。

- ・サンゴ礁と関連生態系の生態的、経済的、文化的な価値についての理解、そして、そのサンゴ礁が重大な危機に直面しているという理解を広めること。
- ・サンゴ礁と関連生態系の保全と持続可能な利用のための有効な管理戦略の策定と実施のため、すべてのレベル（官、民、NGO、地域住民等）で、早急に行動を起こすこと。

このオープニングイベントは、「国際サンゴ礁年」の趣旨に賛同し、保全・普及活動を行う予定の企業、NGO、研究者、出版・報道、行政などの関係者が一同に集まり、2008年の

この目的を達成するため、日本国内では、「国際サンゴ礁年」の趣旨に賛同した企業、マスコミ、NGO、自治体、研究者、個人等が集まり、推進委員会やワーキンググループを形成し、それぞれ主体的に関わる参加型会議を重ね、様々な企画を話し合い、その準備を進めてきています。

今回のオープニングイベントでは、桜井郁三環境副大臣による開始宣言を始め、さかなクンによる国際サンゴ礁年への応援メッセージ、国際サンゴ礁年の概要とイメージキャラクターの発表、サンゴ礁の保全活動を行うNGOの会長で女優の田中律子さんとサンシャイン国際水族館館長安永正さんによる対談、国際サンゴ礁年推進委員会ワーキンググループの代表等によるパネルディスカッションが行われました。

国際サンゴ礁年の記者発表をかねた概要発表では、ワーキンググループ、企業、ダイビング・エコツアー業界、NGO・NPO、市民の協働による取組・メディア紹介及び情報発信など、オープニングイベント開催時までに登録された29の活動計画が紹介されました。この活動計画の登録は、随時受け付けています。サンゴ礁学会のみなさんのさまざまな活動も積極的に登録いただきたく、お願い申し上げます。

また、イメージキャラクターの発表にあわせて、イメージキャラクターの名称とサブキャラクター（友だちキャラクター）を2008年1月31日まで募集することをあわせて発表しました。みなさんに愛されるような素敵な名前と楽しい友だちの応募をお待ちしております。募集要項の詳細は、ホームページ（<http://www.iyor.jp>）でご確認ください。



NPO/NGO 紹介

黒潮実感センター

島が丸ごと博物館 ミュージアム 持続可能な里海づくり

NPO 法人黒潮実感センター
センター長理事 神田 優



▲写真1：海の中の森づくり（アオリイカの人工産卵床設置）

NPO 法人黒潮実感センターのある柏島は、高知県の西南端にある周囲3.9km、人口500人ほどの小さな島です。この島の魅力は、平均透明度20mの澄んだ海と、たくさんの生き物たちです。

柏島の海は南からの澄んだ暖かい黒潮と、瀬戸内海から豊後水道を南下してくる栄養豊富な水とが混じり合うことで、多種多様な海洋生物の宝庫となっています。柏島周辺海域は非サンゴ礁域においては全国有数のサンゴの種数と規模を誇り、そこには日本初記録種や未記載種など100種ほどを含む、約1000種の魚が生息しています。この数は小笠原や沖縄をしのぎ日本一です。

NPO 法人黒潮実感センターは、柏島の豊かな自然環境だけでなく、そこに住む人たちの暮らしもまとめて、「島が丸ごと博物館」と捉え、持続可能な里海づくりを目指した活動を行っています。

「人が海からの豊かな恵みを受取るだけでなく人も海を耕し、育て、守る。」

これが私たちが提唱する「里海」の考え方です。持続可能な「里海」の実現に向けてセンターでは大きく3つの取り組みを行っています。

1. 自然を実感する取り組み
2. 自然を活かした暮らし作りのお手伝い
3. 自然と暮らしを守る取り組み

自然を実感する取り組みでは、柏島の海で調査研究活動を行い、その成果を地元住民や柏島を訪れる観光客に還元するための里海セミナーを開いています。さらに次代を担う子どもたち向けに海の世界学習や体験実感学習を、成人向けにはエコツアーを開催し、柏島の海のすばらしさを実感して貰う取り組みを行っています。しかし豊かな自然環境があっても「環境だけでは飯が食えない」と言われる中で、豊かな自然環境を活用した暮らし作りのお手伝いとして、島おこしの会の方々とともに物産市「里海市」を開催したり、豊かな漁場作りのお手伝いとして、アオリイカの増殖産卵床設置事業などを地元漁業者やダイバー、子どもたちと一緒にしています。豊かな自然がありそれを利用して経済が活性化していても、一方的に海からの恵みを搾取するだけでは良い環境

が残せていけません。そこで大事なことは自然と暮らしを守ることです。この活動では地道な自然環境の変化を把握する調査やサンゴや藻場の保全活動、さらには大勢訪れる観光客の受け入れ態勢を整えつつ、島独自のローカルルールとしての「柏島里海憲章」を策定し、島の環境と人々の暮らしを守っていこうという取り組みをしています。

これまで全国各地で失敗してきた消費型の観光地を目指すのではなく、持続可能な環境立島を目指すべく地域の人たちとともに活動しています。



▲写真2：センターのスタッフが地元の子供にシュノーケリングを教えているところ

- 団体概要：1998年黒潮実感センター設立準備委員会発足、2002年NPO法人格取得
- 会員数：約600名・専従スタッフ2名
- 本拠地：〒788-0343 高知県幡多郡大月町柏島625（旧柏島中学校） TEL:0880-62-8022 FAX:0880-62-8023
- 代表者：理事長 立川 涼
- E-Mail：kuroshio @ divers.ne.jp（代表） ■ホームページ：http://www.orquesta.org/kuroshio/

日本
サンゴ礁
学会第10回大会・公開シンポジウム
報 告実行委員長 琉球大学理学部海洋自然科学科助教
James Davis REIMER

日本サンゴ礁学会第10回大会が11月23日～11月25日琉球大学において開催されました。また、日本サンゴ礁学会10周年を記念して、琉球大学21世紀COEプログラム共催で、11月25日に沖縄コンベンションセンターで記念公開シンポジウムを開きました。

今回の大会では口頭発表47件、ポスター発表92件と過去最多、参加者も200名以上になり、今までの中で一番大きな大会となりました。また、公開シンポジウムには140名が参加し、大変、盛況となりました。24日の懇親会も非常にラブラブで、いろいろなサンゴ礁の話ができ、参加者の皆様が楽しい時間を過ごせたのではと思っています。実行委員の波利井佐紀さんと磯村尚子さん、および公開シンポジウム世話人日高道雄先生、そして手伝って下さったアルバイトの皆さんのおかげで、大会もシンポジウムも何とか無事に行うことができました。最後に、今回の大会にご参加下さった皆様、本当にありがとうございました！来年の大会（静岡）も非常に楽しみです。



写真左：大会実行委員
(左より 波利井・ライマー・磯村)
写真右：ポスター会場の様子

Congratulations!

ポスター賞受賞者報告

日本サンゴ礁学会第10回大会で、以下の方々がポスター賞を受賞しました。本当におめでとうございます！

野澤 洋耕 yokon @ kuroshio.or.jp

所属：黒潮生物研究所



「幼サンゴの生存における微地形（ギャップ）の効果」

ポスター賞 一般の部 このたび、ポスター講演賞に選んでいただき大変うれしく思っています。ありがとうございました。第2回大会から参加させてもらっている私にとって、この賞が一番身近な気になる賞でした。しかしながら、だんだん回を重ねるにつれ、欲しい気持ちも徐々に薄れていき（一番欲しかったピークは博士課程1・2年生くらいだったろうか）、いつしかポスター講演賞の選考に自分が含まれていることすら忘れてしまっていました。今の気持ちを例えるなら、小学生の時、昔から密かに憧れていた娘に思いもかけず声をかけてもらったという感じです。この喜びを忘れず、今後の研究生活を励んでいきたいと思えます。

山本 広美 h_yamamoto @ kaiyohaku.or.jp

所属：沖縄美ら海水族館
共同研究者氏名：高岡博子・金谷悠作



「飼育下トゲスギミドリイシの卵と幼生の健康状態」

ポスター賞 一般の部 このたびはポスター賞をいただき、ありがとうございました。驚きました。今回のポスターには、5年の歳月と、4名の共同研究者の協力、そして水族館飼育・解説スタッフ全員によるチームワークで出したデータがたくさん詰まっています。なかでも、磯村尚子博士（琉球大）の科学的な助言と協力、そして友情がなければ、連日連夜の産卵待ち・交配実験をやり遂げることはできませんでした。感謝！これからも大ボス野中さんを中心に、スタッフ一同、共同研究者のかたと力を合わせて、楽しくサンゴに向き合っていきたいと思っています。

たくましく育つ水族館のサンゴたち。飼育・研究していくと、どんな面白いことが待っているのでしょうか？これからもご期待下さい！

甲斐 清香

所属：琉球大学大学院 理工学研究科
共同研究者氏名：林千緒・酒井一彦



「パリカメノコキクメイシの性的資源配分と幼生保育」

ポスター賞 学生の部 本発表は、サンゴの性的資源配分や繁殖様式が環境条件にどのような影響を受けるのかを移植実験により検証した研究内容でした。成長がゆっくりなうえに、年に1、2回しか産卵しない種を扱ったため、実験の立ち上げから結果が出るまでに約6年もかかってしまいました。しかしデータが全て出揃い、結果が見えたときは時間がかった分余計、心地よい喜びに浸ることが出来ました。

実験を行うだけでなく、1つの研究としてまとめあげるにあたり、多くの方々からご助言を頂くことが出来ました。研究をまとめポスター発表の機会を持つことが出来たのも、賞を頂くことが出来たのも、多くの方に支えて頂き、ご助言を頂くことが出来たからだ、心から感謝しております。このような賞を受賞させていただき、誠にありがとうございました。

日本サンゴ礁学会 学会賞・川口奨励賞

賞受賞者報告



山里 清 名誉会員の紹介と受賞理由

山里清会員は昭和41年の6月にハワイ大学の大学院博士課程を修了され、博士号を取得されました。昭和44年から琉球大学理工学部の教授として活躍され、平成8年3月に退職、同じ年の4月から名城大学の教授として活躍され、平成15年退職され現在に至っています。サンゴを中心としたサンゴ礁の様々な無脊椎動物の生活史、サンゴの生殖、競争、石灰化に関する多くの論文を発表され、サンゴ学の発展に貢献されました。人為的影響やオニヒトデの影響やサンゴの白化現象を世界に先駆けて報告されました。アジア太平洋諸国の留学生等、サンゴ礁研究者の育成に力を注がれてきました。日本サンゴ礁学会への貢献では学会の設立準備、平成9年から平成17年までの8年間初代会長として、学会の礎を築くために努力されました。特に2004年の第10回国際サンゴ礁シンポジウムの国内誘致、準備、運営には大会会長としてご尽力されました。

選考委員会 鈴木 款

日本サンゴ礁学会賞をいただいて

山里 清



日本サンゴ礁学会設立十周年の記念すべき年に第一回学会賞を受賞する光栄に浴し、大変名誉なことと感激しています。私は、約50年前にサンゴやサンゴ礁の研究を始めましたが、その頃はサンゴ礁研究者はわずかで、たいそうさびしいものでした。それで、サンゴ礁研究者が増えることを熱望しました。年とともに研究者が増え、10年前には、日本サンゴ礁学会が設立されるまでになりました。しかも、学会員の数も当初の2倍以上にもなり、活気にあふれるようになりました。たいへん喜ばしいことです。今回の学会賞は、古くから孤独を味わいながらサンゴ礁研究に取り組んできたことをよしとして与えられたものと、うれしく、ありがたく思います。同時に、この学会賞は、学会設立に取り組まれたり、学会の発展に貢献されたすべての学会員の方々に贈られたものと、ともに喜びたいと思います。



深見裕伸博士の紹介と受賞理由

深見裕伸博士は、平成12年3月に東京水産大学大学院水産学部博士課程を修了され、水産博士の学位を取得されました。その後、スミソニアン熱帯研究所、次いでカリフォルニア大学サンディエゴ校スクリッパ海洋研究所においてPD研究員として勤務されました。平成17年4月に京都大学フィールド科学教育研究センター・瀬戸臨海実験所の助手に着任され、現在、同実験所の助教をつとめておられます。サンゴ類の進化および系統分類に関して世界的な業績をあげておられ、今回の川口奨励賞の受賞者として選ばれました。

選考委員会 渡辺 俊樹



山野博哉博士の紹介と受賞理由

山野博哉博士は、平成11年3月に東京大学大学院理学系研究科地理学専攻の博士課程を修了され、博士(理学)の学位を取得されました。その後、科学技術振興事業団プロジェクト研究員を経て、平成11年12月に国立環境研究所に研究員として着任され、現在同研究所の主任研究員をつとめておられます。リモートセンシングを用いたサンゴ礁環境の解析の分野で世界的な業績をあげておられ、今回の川口奨励賞の受賞者として選ばれました。

選考委員会 渡辺 俊樹

深見 裕伸

hfukami @ kais.kyoto-u.ac.jp



この度は川口賞の栄えある初代受賞者にお選びいただき、大変嬉しく、光栄に思っております。近年のサンゴ関連の研究において、環境保全に直接結びつく研究が増加している一方、サンゴ自体の基礎的な知見を得るための研究が少なくなっているように思えます。しかし、何事も小事から始めると申します。そういった意味で、分類・系統分野の研究に対してこのような賞をいただいたことは、今後の研究を進めていく上で自信にもなりますし、また、今後研究者を志す若い人たちがこれらの分野に興味を持つきっかけとなれば幸いに存じます。最後に、私を研究者として育てていただきました先生方、常に支え続けてくださっている家族、この度審査していただきました先生方に厚く御礼申し上げます。

リモートセンシングを用いたサンゴ礁環境の解析に関する研究

山野 博哉

hyamano @ nies.go.jp



川口奨励賞をいただいて大変光栄に思っています。私は1999年に現在の研究所に職を得てからリモートセンシング研究を本格的に始めました。当時は大変苦労しましたが、今回こうして新しい分野での仕事が評価されたことは大変励みになります。これからも、その当時の気持ちを忘れず新しい分野にチャレンジしていくとともに、研究・保全両方でリモートセンシングの応用を進めていきたいと思っています。リモートセンシングの対象は生物から地学までさまざま、現地調査の機会も多く、本当に多くの方々のお世話になりました。特に、私をサンゴ礁研究に導いて下さった茅根 創さん(東京大学での私の指導教官)、就職後もサンゴ礁研究を認め継続させて下さり、リモートセンシング研究に導いて下さった田村正行さん(国立環境研での私の上司、現京都大)、この方々無くして今の私はありませんでした。改めて深く感謝いたします。

日本サンゴ礁学会 第11回大会 静岡市 グランシップで

開催!! 2008年11月22日(土)・24日(月) 予定

国際サンゴ礁年の学会開催ですので、「サンゴ礁研究の最先端と国際連携」というような課題で企画をして行きたいと考えています。また欧米からの研究者を招待する予定です。会場には NGO・NPO 関連の展示・写真展の開催も考えています。会場は富士山が一望できるすばらしい眺望の場所です。東静岡駅から3分という便利な会場です。多数の皆様の参加をお待ちしております。

実行委員長 鈴木 款

日本サンゴ礁学会 評議員会 議事録

●日時：2007年11月22日(木) 14時～17時

●場所：サザンプラザ海邦 3F「カトレア」

■出席者(あいうえお順、敬称略)：安部、井龍、岩尾、大葉、大森、岡地、茅根、菅、杉原、鈴木(款)、土屋、中井、中野、瀬岡、西平、野島、長谷川、服田、林原、波利井、日高、日比野、藤原、渡邊(剛)、山口、山野

■オブザーバー：中島慶次(環境省)

■欠席者：大城、酒井、鈴木(淳)、堀、渡邊(俊樹)、家中

評議員数29(定足数10)、出席26、委任状5、欠席6

■書記：日比野

1.委員会報告

<事務局>(茅根)

○会員動向：2007年11月16日現在516人。会員数が初めて500人を超えた。

○2006年7月～2007年6月の会計報告：収入計3,500,976円、支出計2,791,727円(10th ICRSプロシーディングス代3,385,500円は除く)、次年度予算3,500,000円→承認
・会計監査からの指摘により、川口基金は別の通帳に移す。

○10年間の会員動向調査結果報告：分析から見出された課題：①賛助・会友会員を増やす必要がある、②社会・文化・地理分野を増やす必要がある、③就職先が少なく、大学に残っている学生が多いため、人材育成を学会として取り組む必要がある。

<企画運営委員会>(鈴木(款))

○学会賞・川口賞：候補者選考を行い、学会賞(山里会員)、川口賞(深見会員、山野会員)が選考。→承認
・学術面でないサンゴ礁への功労者・貢献者についても該当する賞が必要との認識。→保全委員会で検討を進める。

○「現在サンゴ礁の世界(仮題)」(日本サンゴ礁学会編集)の出版：東京大学出版会と相談中。出版は来年の10月ぐらいを予定している。→方向性について承認。

○11th ICRS(2008年7月)：日本のサンゴ礁研究・活動をアピールするためにブース(1500米ドル)を出展する方向で検討中。出展資金及び内容・調整について要検討。→体制も含めて検討していく。

・川口基金から若手研究員を対象に10万円程度の旅費支援を計3～4名程度に提供することを検討。ICRS Student awardsに応募した人を優先したい意向。→承認
・(質)川口基金の今後の使い方は？→(答)川口賞賞金(年1～2名、各10万円)、メダル(10年分20万円)、ICRS旅費支援(30～40万円/4年)の計算で、年間計30～40万円支出予

定、25～30年で使い切る計算。

・(質)大学ではICRSで発表する学生に対して渡航費補助は出ないのか？→(答)出ない場合が多い。

・(意)川口基金から出すからにはきちんとした選考・形式で支出すべき→(答)その方向で検討する。

○文部科学省科学研究費(2月公募開始)の新学期領域への応募：若い会員の応募を学会として支援していくことを検討中。

○10th ICRSプロシーディングス(2200ページ、2冊セット)を100冊印刷中。現在海外からの申し込み40、国内26。ドルー円為替レート変動により当初の発売額では送料が支出できないことが判明。川口基金から借用して作成したので全部売り切ることが重要。CD版は145部残部があり。11th ICRS後はフリー公開になるので、それまでに完売したい意向。

○2008年の国際サンゴ礁年企画として、学会主催の日本縦断連続講演会を検討中。→検討を進める。

<学会誌編集>(山野)

○新編集体制が決定。

○投稿規程：新たに学会賞・川口賞論文に関する規定などを盛り込んで改定された。

○次号(Vol. 9, No1)：12月中に発行予定。

○来年4月ごろにはその次の号(大会シンポジウム特集号)を発行したい意向。年度をまたぐので、Vol. 9.2とはせずにVol. 10.1にしたい。

・学会賞、川口賞受賞者に記念論文の執筆を依頼。原則、学会賞は日本語、川口賞は英語で1月締め切りを予定。

○J-STAGEに登録作業中。電子ジャーナル化を目指す。→承認

・J-STAGE対応などのため、出版社を大里印刷から創文印刷に変更。

・電子ジャーナル化に際して、論文を完全公開にするか、会員専用のパスワードを設けてアクセスを制限するかについて議論。学会員のメリットとGalaxeaの今後の地位向上・国際化に向けたメリット双方の観点について検討。→意見を基に検討する。

<保全委員会>(瀬岡)

・第9回サンゴ礁保全委員会を9月22日に開催し、3つのプロジェクトチーム(PC)を柱とする新体制を立ち上げた。

・第10回サンゴ礁保全委員会を11月25日に開催予定。各グループの今後の活動目標・方針・体制などについて議論する。

・「サンゴ礁保全再生連絡会議」の創設と運営を目指している。環境省が同様なコンセプトの事業を開始したの

で、協力していく方向で相談中。

・「サンゴ礁環境常時モニタリング・ネットワークシステム」、「サンゴ礁保全再生ポータル・ウェブサイト」の立ち上げを検討している。

・企画委員会が検討を進めている日本縦断連続講演会については普及啓発PCも協力していく意向。

<国際連携委員会>(土屋)

○11th ICRS：米国へのビザ・入国の問題で参加者が少ないため、JCRSからの参加を期待。

○環境省からの情報提供：2008年に国際サンゴ礁保護区ネットワーク会議の準備・検討を進めている。→学会との関わりについても検討していく。

○今後の関連国際会議：①2008年10月に海水の酸性化についてモナコで会議がある；②太平洋学術会議の中間会議が2009年3月にタヒチである。情報が入り次第会員に案内を流す。

○国際サンゴ礁年の国内活動について、科学者WGと沖縄県から情報提供を受けた。12月9日に国内の国際サンゴ礁年開始を宣言するキックオフシンポジウム(120人規模)が立教大学である。マスコミにアピールする決起集会のような位置づけ。

<広報委員会>(日比野)

○ニュースレター(NL)No.34(7月)、No.35(10月)を予定通り発行した。今後とも年4号を発行していく予定。

○国際サンゴ礁年では、特別にイベントは行わず、各委員会活動の対応や学会ホームページ(HP)のリバイスなどを行う。

○NLの広告獲得の是非について：

・①広告獲得が委員にとって大きな負担になっている。②現状ではNL、大会、Galaxeaの3つで広告をバラバラに獲得しており、一つの組織として1本化すべき、との理由から、広告獲得について議論も含めて評議員会に返上したい旨の申し出があった。

・これまでの広報委員会の広告獲得努力に対して評議員会から感謝の意が伝えられ、広告に頼らないと出せないNLはおかしい、記事の中立性の観点から広告は疑問、会計上の理由から今後も広告獲得は必要などの意見が出た。これらの意見を踏まえ、広告獲得は副会長と事務局(十数名)を中心に1本化し、学会の財務戦略の一環から再検討することになった。

<選挙管理委員会>(長谷川)

・選挙が終了したばかりなので活動報告はない。

<安全委員会>(杉原)

○11月25日にNPO法人沖縄県ダイビング安全対策協議会の後援を得て安全講習会を実施する。

○ダイビング調査時の事故防止と安全管理意識の向上を目的として、CPRを中心とした緊急処置の体験実習なども交えた講習となる。

2.その他審議・報告事項

○公開シンポジウム(25日)の共催者の追加(日高)：

・共催者にCOEを加える提案が大会実行委員会からあり、承認された。

○委員長の任期(杉原)：

・現状の規約には、各委員会委員長の任期に関する規定がなく、①委員長が固定して交代が少ないこと、②特定の委員会で後任の委員長を捜せないという問題点が指摘された。

・議論の結果、会則を改定し、第17条、第3号の文末に「委員長の任期は2年間とし、再任は妨げない。」を追加することが承認された。

○委任状のメール送付(茅根)：

・委任状は、今後メールでの案内及び返信送付を受け付けることが提案された。→承認

○ロゴの使用規定(波利井)：

・学会ロゴに関する規定がこれまでなかったため、ロゴの使用について新たに4項目を規約に追加することが大会実行委員(波利井)から提案された。→ロゴ規定を盛り込むことで合意。

・意見を反映したロゴ使用規定(案)を評議員会ML中で審議して決める。

○名誉会員の推薦(井龍)：

・大村明雄ら7名の会員からなる推薦者が、小西会員(前会長)を名誉会員に推薦する理由書を提出し、承認された。

○大会準備状況(波利井)：

・準備は順調に進んでいる。
・今大会は学会設立10周年記念大会に当たるため、記念シンポジウム「日本のサンゴ礁研究と歩みと展望」(COE共催)を25日に開催する。また、記念Tシャツ及び記念ポストカードも販売する。

・今回の記念大会運営にあたり収集・整理した過去の大会情報をEXCELファイルにまとめたので、次の記念大会でも有効活用してもらうために、データを事務局で保管してもらうことを提案。→承認

・発表者の資格：連名の中で必ず一人は学会員であるべきだが、既存の内規には明記されていない。→内規変更はしないが、大会ごとに明記する。

・今回の大会は発表者数が今までで一番多く(140件)、このままの大会運営形式では今後支障を来すことが予想される。日数を増やす、あるいは会場を複数にするなどについて検討。→今大会が終了した時点で問題点などを実行委員会で整理して、評議員会に提出する。

○次回大会：

・次回大会は静岡において静岡大学(鈴木会員)が中心となり開催することが提案された。→承認

・日時は11月22～24日との提案があったが、再度検討することになった。
・大会開催にあたっては、コンベンションセンターから、泊まった人数×宿泊数×500円の補助金が出ることになった。

日本サンゴ礁学会 総会 議事録

- 2007 年 11 月 24 日午後 4 時 45 分～ 5 時 45 分
- 於 琉球大学千原キャンパス内学生会館
- 議長団：井龍康文、大葉英雄、杉原 薫

1. 開会挨拶

茅根創事務局長(東大)より総会開会の挨拶が述べられた。

2. 会長挨拶

西平守孝会長(名桜大)より本大会実行委と参加者への感謝の意と来年の国際サンゴ礁年へ向けての抱負(学術的・社会的貢献)が述べられた。

3. 議長団選出

出席者からの立候補がなかったため、中野義勝会員(琉球大)より議長に井龍康文会員(東北大)が推薦され、井龍会員より副議長に大葉英雄会員(東京海洋大)、書記に杉原薫会員(福岡大)が指名され、承認された。

4. 定足数の確認

開会時点の総会出席者は102名、委任状は40通で、その総数が投票権のある会員数(451名)の1/5以上となっていることから総会は成立した。

5. 議事確認

新規議事の提案はなかった。

6. 事務局報告

茅根事務局より、11月16日時点での会員動向および2006年／2007年度の会計報告がなされた(資料全員に配布)。

サンゴ礁学会 会員数	
2007 年 11 月 16 日現在	
通常	334
外国	10
学生	93
会友	44
団体	21
賛助	7
名誉	4
寄贈	3
合計	516

7. 会計監査報告

保坂三郎会員(熱帯海洋生態研究振興財団)より、2006年／2007年度会計が適正に処理されていることが報告された。また、川口基金についてはその他の予算とは別口座で処理することが提案され、承認された。

8. 委員会報告

(1) 企画運営委員会

鈴木款委員長(静岡大)より、学会賞は山里清会員、川口賞は深見裕伸会員と山野博哉会員がそれぞれ選考され、総会後に授賞式を行うことが報告された。また「現代サンゴ礁の世界(仮題)」の出版、11th ICRSでの日本サンゴ礁学会のブースの出席、若手研究員(計3-4名程度)を対象に川口基

金から国際学会発表のための旅費支援(一人につき10万円程度)、2008年の国際サンゴ礁年企画として学会主催の日本縦断連続講演会の開催をそれぞれ検討していること、そして10th ICRSプロシーディングス100冊が現在印刷中であることが報告された。

(2) 学会誌編集委員会

山野博哉委員長(国立環境研)より、新編集体制が決定したこと、学会賞・川口賞論文に関する規定などを盛り込んだ投稿規程が改定されたこと、現在10編の投稿を受けていること、学会賞・川口賞受賞者に記念論文の執筆を依頼していること、Galaxeaの電子ジャーナル化に向けてJ-STAGEへの登録作業を行っていること、電子ジャーナル化に際し論文を完全公開にするか会員専用のパスワードを設けてアクセスを制限するかを検討中であることが報告された。

(3) 保全委員会

灘岡和夫委員長(東工大)より、10th ICRSの「沖縄宣言」に基づくアクションプランのターゲットを明確化するために3つのプロジェクトチーム(サンゴ礁保全再生・サンゴ礁広域一斉調査・普及啓発)を柱とする新体制を立ち上げたこと、環境省とタイアップし「サンゴ礁保全再生連絡会議」の創設と運営を目指していること、サンゴ礁保全再生ポータル・ウェブサイトの立ち上げを検討していることが報告された。

(4) 国際連携委員会

土屋誠委員長(琉球大)より、先日開催されたICRI会議と太平洋学術会議が盛況であったこと、国際サンゴ礁年の国内活動について科学者WGと沖縄県から情報提供を受けたこと、2008年7月にフロリダで開催される11th ICRSの参加申込者が少ないためJCRSからの参加が期待されていること、環境省を中心として2008年秋に開催予定の国際サンゴ礁保護区ネットワーク会議の準備・検討を進めていることと今後の関連国際会議についての紹介があった。

(5) 広報委員会

日比野浩平委員長(自然研)より、ニュースレターNo.34およびNo.35号が予定通り発行されたこと、11th ICRSの広報に協力してセカンド・サーキュラーの配布や大会での宣伝を実施したこと、国際サンゴ礁年に向けて学会HPの充実を目指すこと、NLへの投稿・意見を募集していること、NLの広告獲得が広報委の大きな負担となっており、Galaxeaや大会の広告獲得と合わせて今後評議員会が一本化の方向で検討していくことになったことが報告された。

(6) 選挙管理委員会

長谷川均委員長(国士舘大)より、2007年度の会長・評議員選挙結果が述べられた。

(7) 安全委員会

杉原薫委員長(福岡大)より、11月25日に沖縄県ダイビング安全対策協議会の後援で安全講習会を実施すること、それを機に今後の活動内容の再検討を行う予定があることが述べられた。

9. 各種委員会委員長の任期設定と会則の変更

現状の規約には各委員会委員長の任期に関する規定がないことについて

の議論が評議員会で行われた結果、会則を改定し、第17条第3号の文末に「委員長の任期は2年間とし、再任を妨げない。」を明記追加することが総会出席者3分の2以上の挙手によって承認された。

10. 名誉会員の承認

大村明雄会員ら7名の会員からなる推薦者が、小西健二会員(前会長)を名誉会員に推薦する理由書を提出し、その主旨が推薦人の井龍康文会員(東北大)によって紹介され、総会出席者の拍手をもって承認された。

11. 本大会状況

James D. Reimer大会実行委員長(琉球大)より、本大会で計139件の発表(口頭:47件・ポスター:92件)があったことが報告され、本大会への参加者・協力者に向けて謝辞が述べられた。

12. 次回大会

鈴木款企画委員長(静岡大)より、次回大会は静岡で開催すること、日時は未定ながら今年とほぼ同様の時期を検討していることが述べられた。

13. 総会閉会

議長団より、議事が終了した旨のアナウンスがあり、総会が閉会した。

日本サンゴ礁学会2006/2007年度 (2006年7月1日～2007年6月30日)				会計報告	事務局
収入の部		06-07予算案 担当 07-08予算案 (案)			
前年度繰越金	6,190,709	事務局口座 5,383,409			
		会費口座(郵便局) 603,500			
		会費口座(銀行) 203,800			
会員会費	3,180,900	郵便局 2,964,000	3,000,000	事務局	3,100,000
		銀行口座 216,900			
購読料	64,156	銀行口座 64,156	100,000		100,000
学会誌広告費	50,000		100,000	学会誌	100,000
ニュースレター広告費	87,950		100,000	広報	100,000
バックナンバー販売	8,000				
JST情報利用料	4,620				
2006年大会準備金返却	100,000		100,000	事務局	100,000
利息	5,350				
本年度収入合計	3,500,976		3,400,000		3,500,000
支出の部					
毎日ビジネスサポート	1,330,412	業務委託費 438,088	400,000	事務局	500,000
		実費 539,104	450,000	事務局	500,000
		名簿作成 353,220	200,000	事務局	
学会誌印刷費	344,700	1号	850,000	学会誌	1,200,000
ニュースレター作成費	743,795	4号	750,000	広報	750,000
評議員旅費	145,000		200,000	事務局	200,000
諸経費	184,620	郵送料 10,490	200,000	事務局	200,000
		M.L.使用料 12,600			
		振り込み手数料 7,770			
		庶務バイト 38,000			
		会場費 100,000			
		選挙経費 6,560			
		その他 9,200			
委員会活動費	43,200		100,000	事務局	250,000
2007年大会準備金			100,000	事務局	200,000
支出合計(経常)	2,791,727		3,250,000	経常費	3,800,000
10ICRS Proc	3,385,500		3,250,000	10ICRS	4,560,000
支出計	6,177,227				
次年度繰り越し				収支(経常)	-300,000
繰り越し+収入-支出		3,514,458		10ICRS	-4,560,000
川口基金		10,000,000			900,000
次年度繰り越し+川口基金		13,514,458			
口座残高					
事務局口座	9,462,102				
会費口座(郵便局)	3,567,500				
会費口座(銀行)	484,856				
口座残高計	13,514,458				

名誉会員の紹介

小西健二先生が名誉会員に
推薦され、承認・表彰されました。



小西健二会員は、1929年に東京都に生まれ、1951年東京大学理学部地質学科卒業、同大学院に進学、在学中に、石灰藻化石研究のためフルブライト留学生として、コロラド鉱山大学・アメリカ地質調査所に勤務。帰国後は、東京大学助手を経て、1994年金沢大学理学部部長を最後に定年退官するまで、研究教育に尽力した。退官後は、金沢大学名誉教授として社会貢献を続け、1997年のサンゴ礁学会創立後は、評議員(1997-2005年)、第2代会長(2005-2007年)として、その発展に貢献した。

小西会員の業績は、広範かつ旺盛な学問的興味を反映し、多岐に渡っている。コロラド鉱山大学では、当時、研究分野において世界の第一人者であった Harlan Johnson 教授のもとで、石灰藻化石の分類学的研究で世界的な業績をあげた。金沢大学着任後から、琉球列島の地質学的研究に取り組み、同列島の地帯構造論を発表後、第四紀サンゴ礁堆積物の研究に取り組んだ。なかでも、日本国内でいち早く、ウラン系列放射性同位体を用いた年代測定法や炭素・酸素安定同位体分析による古環境推定法を導入し、サンゴ礁堆積物から氷河性海水準変動やプレートテクトニクスを議論したほか、第四紀サ

ンゴ礁の多孔掘削調査やサンゴ骨格から時間的高分解能で古海洋環境等を解説するという国際的にも先駆的な研究を行った点は高く評価される。また、日仏日本海溝共同調査(KAIKO)計画による第一鹿島海山潜水や国際深海掘削計画(Ocean Drilling Program)によるグレートバリアリーフ沖掘削などの国際海洋共同研究に参加し、それらに大きな貢献を果たした。

小西会員の特定分野にとらわれないグローバルな視点の地球科学観は、研究面のみならず、教育・普及活動にも強い影響を及ぼし、古生物学、炭酸塩堆積学、構造地質学、海洋地質学などの広い分野に後進を育てた。その薫陶を受けた者は、大学、研究所、企業など、社会の第一線で広く活躍している。

さらに、小西会員は沖ノ鳥島の保全対策、沖縄国際サンゴ礁研究モニタリングセンターの発展にも尽力した。以上の学術的・社会啓蒙的業績により、小西会員には、日本古生物学会学術奨励金(現学術賞)や石川テレビ賞、金沢市文化賞が授与された。

以上、小西会員の長年にわたる日本のサンゴ礁学の発展への多大な貢献は、日本サンゴ礁学会の名誉会員としてふさわしく、ここに推薦する次第である。

推薦者 井龍康文(東北大学大学院理学研究科 准教授)
大村明雄(金沢大学 名誉教授)
大森 保(琉球大学理学部 教授)
辻 喜弘(石油天然ガス・金属鉱物資源機構 地質探査研究課長)
松田伸也(琉球大学教育学部 教授)
荒井晃作(産業技術総合研究所地質情報研究部門 主任研究員)
茅根 創(東京大学大学院理学系研究科 教授)

安全講習会が行われました

日本サンゴ礁学会第10回大会期間中の11月25日に、NPO法人沖縄県ダイビング安全対策協議会理事の村田幸雄氏を講師に招いて「安全講習会」が開催されました。

サンゴ礁調査安全委員会 杉原 薫



CPRの実技講習の様子

第一部では潜水の隠れた危険性についての講演が行われました。私たちは、潜水業務が労働安全法上では危険な業態であることを再認識するとともに、潜水士免許の取得・DAN保険への加入・安全調査計画書や緊急連絡網の作成といった雇用者や研究責任者の安全管理意識向上の更なる必要性を痛感しました。また、減圧症などの潜水障害で緊急の搬送や治療が必要となっても国内では迅速に対応できる専門機関や設備が限られていること、日ごろ気軽にやっているスキンドビングやシュノーケリングにも減圧症やその他の潜水障害にかかる危険性があることなど、普段の生活ではあまり耳にしない情報や事例についても詳しく聞くことができました。

第二部では、人形・人工呼吸用マスク・酸素ボンベ・AED(自動体外式除細動器)などを用いたCPR(心肺蘇生法)の実技講習が行われました(写真)。参加者一人ひとりが人工呼吸や心圧迫をそれぞれ体験することにより、意識の確認・気道の確保・心圧迫の姿勢などはコツを得ていないと効果が出にくいことを再認識しました。また、これまで人工呼吸用マスクやAEDを扱ったことがなかった参加者にとっては、その使用方法や手順の説明は、非常に有意義であったと思います。

サンゴ礁調査安全委員会は、今後も地道な活動を通して学会構成員の安全管理意識と調査研究スキルの向上に努めていきたいと思います。なお、開催された安全講習会のもようは、写真とともに学会HPに近日中にアップする予定です。

サンゴワークショップ『サンゴの分類と同定2007』

2007年9月3日～6日、沖縄県名桜大学総合研究所にて、ワークショップ『サンゴの分類と同定2007』が、日本サンゴ礁学会および名桜大学総合研究所の共催によって開催されました。この実習は、日本サンゴ礁学会会員を対象として、会長である西平孝先生(名桜大学)のご指導のもと、骨格標本を使って日本産

産サンゴ類の全属(約80属)の同定を学ぶのが目的でした。受講者16名全員が多くのことを学び、再受講の希望や種レベルでの同定講座の実施、野外での講座の実施の要望などの声がありました。本郷由軌さんから感想文をいただきましたので紹介いたします。

東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻 博士課程・茅根研究室 本郷 由軌 c-hongo@eps.s.u-tokyo.ac.jp



机に並んだ膨大なサンゴ標本と熱心にスケッチする受講者

海を望むことができる名桜大学総合研究所の入り口から、会場となっている研修室に足を踏み入れた際に目にした光景にまず驚いた。研修室後ろの長机の上にずらりと隙間なく並んだ、膨大なサンゴ標本にびっくりした。

最初にワークショップ開催趣旨の説明(西平先生のお話:とにかく・・・、今回は思いっきりサンゴと遊んでください・・・)を聞いた後、参加者はルーベと双眼実体顕微鏡を覗きながら、大学ノートや方眼紙を用いてそれぞれのスタイルで、まずはムカシサンゴ属からスケッチに取り掛かることになった。ときおり聞

こえてくる、「この軸柱は・・・、隔壁の配列が・・・」といった会話の他には、おしゃべりはなく、本当に真剣にそして黙々とスケッチを始めていた。

2日目の朝、私が会場に到着した時には、ほとんどの人が既に顕微鏡を覗きながらスケッチを始めていた。ひょっとしたら夜通し作業していたのかと思ったほど、昨日の光景がそのままに広がっていた。私も早速スケッチに取り掛かったが、ときおり聞こえてくる会話が気になって仕方がなかった。ある人は、「今日の夢にサンゴが出てきた」、ある人は「見るものすべてがサンゴに見えてしまったよ～」などと、聞いていて頷ける内容ばかりだったからである。私も、昨日の夕食時からゴーヤのイボイボを見ただけでコモンサンゴ属のイボ状突起が思い浮かんだり、ソーキそばを食べながら、骨に棘や隔壁がないか探してみたりと、頭の中がサンゴでいっぱいになっていたからである。わずかに数mm程度の隔壁や杭などを使って様々な表情を作り出すサンゴに、あらためて驚き、そして興味がとめどもなく湧いてきた。

最終日に登場したのは八放サンゴ類であった。これ

までずっと白一色だった骨格標本に加えて、青色の骨格標本(アオサンゴ属)や赤色の骨格標本(クダサンゴ属)を顕微鏡越しに眺めていると、疲れ眼が癒えていくのを感じた。最後に「サンゴ骨格同定100問テスト」があり全員が悪戦苦闘した。しかしながら、参加者の誰もが、英の形状や隔壁の配列などの客観的特徴に注目したうえで、自分自身が分類できるサンゴとできないサンゴがあることを認識することができたことが一番の収穫であったと思う。次のステップで、他の特徴に注目し、分類できるサンゴを増やしていけば良いと思う。

最後に、これまで知らなかったサンゴと触れ合うことを通して、サンゴに対する尽きない興味を抱く機会をくださった西平先生に感謝するとともに、会場設営や運営をしてくださった名桜大学総合研究所の方々にお礼申し上げます。今回のワークショップに参加して、私たちの知識や視野が格段に広がった。参加して得たものを、今後の研究活動に活かし、サンゴ礁研究の発展に寄りたい。

連載 1 サンゴしょう夜話 -24-

バハマ浅海底を転がるウーライト： ウーイズ（魚卵石）

金沢大学名誉教授 小西 健二

今年は国際サンゴ礁年 2008、6 月にはフロリダで第 11 回国際サンゴ礁シンポジウムが開催される。32 年前マイアミ大における第 3 回は、第 11 回同様野外巡検の充実した会議で、本誌 No.30 に記したように快適な会期を過ごし、合間を縫い、Hoffmeister 博士（先行台説提唱）と歓談、酸素温度計実用化の先駆者の一人 Emiliani 教授からは飼育実験の苦労話や海洋学部で学士号を出す便法を聞いた。巡検は以下の理由で、Shinn と Hudson の案内するフロリダ・キーと Ginsburg の高弟 Gebelein の案内するキャタラン船によるバハマ・バンクのアンドロス島を縁取る礁複合体を選んだ。（共に今回は巡検コースにある。）

ウーライト（ウーイズ）が日本のペルム・石炭紀の礁石灰岩や中生代後期の鳥の巣型石灰岩に伴う魚卵状石灰岩から非生物炭酸塩粒子として頻出し、堆積環境を特定する指標になることを学び、米国でカンブリア紀ストロマトライトの基質充填、ジュラ紀アルカリ湖成モリソン層、英国でジュラ紀中期を特徴付ける岩相と、時空を通じ普遍的な産出に惹かれた。その後、アラビア湾や地中海東部の海辺の例も確かめた。結婚の喜

びか、敗戦の悔しさか、定かでないが、トルコ南部では「クレオパトラの涙」と呼ぶ。

現在のウーライト（ウーイズ）が、アラレ石に過飽和で、強い流れが交互する、不安定な極浅海・湖底で、回転しながら、核のまわりを、アラレ石の針状結晶（図 1）が同心円状に幾層も重なってできるという観察や水槽内模擬実験の報告を読み、魚卵石が固結したマイアミ・ウーライト（12.5 万年前）やグレート・ソールト湖畔・離水汀線の現世堆積物も観察したが、Sorby, Vaughn, Newell, Cloud, Hardie らが、形成中「魚卵石」の原型としたバハマ・ウーライト（図 2）を、現場で確かめ、自分の両手一杯に抱えてみたいとの熱望が、私をバハマの巡検へと駆り立てた。潮間・潮上帯より深い浅海成ストロマトライトも潜って確認したかった。

丁度その頃、炭酸カルシウム質ウーライトをつくる鉱物がアラレ石でなく方解石の地質時代が存在する、つまり海洋は地史を通じアラレ石の海と方解石の海が交互に繰り返すという仮説（Sandberg et al. 1975, Mackenzie & Pigot, 1980）が提唱され、やがて、非定常な海嶺活動に着目した Hardie(1996), Stanley ら支持派は、海水の Mg/Ca モル比の変動と相関することを主張し、No.32 本欄で私や No.33 ASLO 報告で渡邊敦氏が紹介したように、同じ研究室の Ries et al.(2006 ほか) は方解石海（白亜紀に近似した人工海水）内で本来アラレ石かマグネシウム方解石を形成する造礁生物に複数の鉱物相の骨格を分泌させるという大変刺激的な研究に発展している。バハマのアラレ石質ウーライトの研究は、このような壮大な構想の濫觴といえる。

今回は、完新世サンゴ礁の構造や生態群集を陸上で詳細に観察する（ドミニカ西部）、巡検も見逃せない。

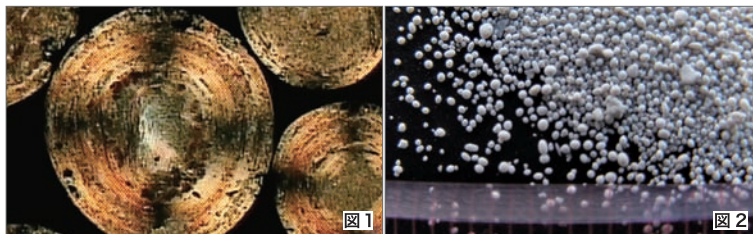


図 1: バハマウーライトの偏光顕微鏡写真（直交ニコル）
（Cat Cay 産：採集、結城智也：写真提供、JOGMEC）

図 2: バハマウーライトの肉眼写真
（下端赤線の間隔は 1 ミリメートル）

編集後記

今号では第 10 回大会に関連して、ポスター賞、学会賞、川口奨励賞の各賞受賞者より喜びの声を寄せていただきました。学会 10 周年を祝す賑やかなものになったと思います。

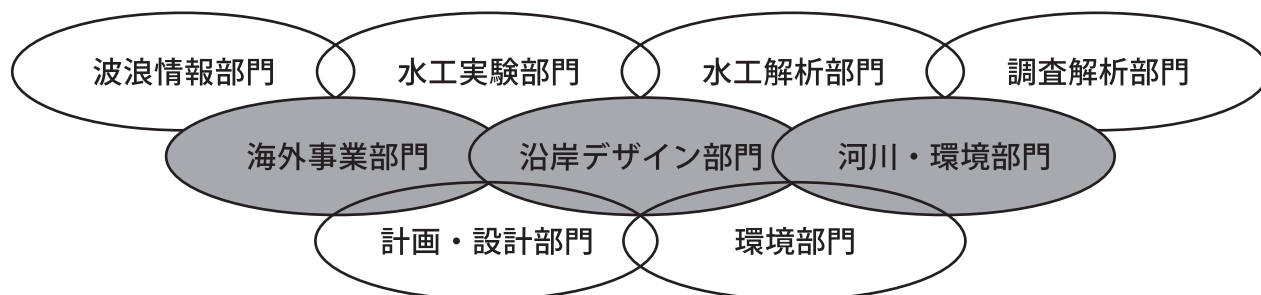
編集担当 渡邊 敦



日本サンゴ礁学会ニュースレター [2007 / 2008 No.3]
Newsletter of Japanese Coral Reef Society No.36

● 編集・発行人／「日本サンゴ礁学会広報委員会」 日比野 浩平・安部 真理子・井口 亮・梅澤 有・鈴木 倫太郎・中村 崇・藤村 弘行・渡邊 敦
● 発行所／日本サンゴ礁学会 ● 事務局／茅根 創 <kayanane@eps.s.u-tokyo.ac.jp>
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院 理学系研究科 地球惑星科学専攻 Fax: 03-3814-6358

青い地球を豊かに！ それが私たちの願いです



建設コンサルタント

株式会社 **エコー**

ISO9001 認証登録

ECO Hで検索してください
URL: <http://www.ecoh.co.jp/>

本社 〒110-0014 東京都台東区北上野 2 丁目 6 番 4 号 上野竹内ビル TEL03 (5828) 2181
沖縄事務所 (098)941-2510